
Scientific Approaches to Language No.5 March 2006

はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の紀要、第5号を刊行いたします。本紀要は通常、各年度におけるCLSでの研究成果を中心に編集しておりますが、本号は、2006年2月11・12日にCLS主催で開催した言語学ワークショップ『日本語の主文現象と言語理論』の特集号で、そこで発表された研究論文が15編収録されています。※1

そのワークショップのプログラムは巻末の今年度活動報告（271-272頁）に記載されていますが、本号での掲載もその発表順に準じています。

まず、拙論の「日本語の主文現象と統語理論：今、主文現象が面白い」により、ワークショップ（および本号）の趣旨と意義について、日本語統語研究の流れを生成統語論の変遷に言及して述べています。それに続き、ワークショップのテーマである主文の特徴と構造や派生を中心に、前半の6編（井上和子、伊藤健人、佐野まさき、内堀朝子、岸本秀樹、上山あゆみ、各氏の論文）で、モダリティと取り立て詞、主題文（トピック文）とそうでない文の構造と意味、補文と主文の相違などを、記述・理論の両面から考察しています。そして、後半部では、長谷川信子、外崎淑子、上田由紀子、各氏の論文で、主文のモダリティと人称制限や省略との関わりが扱われ、柳田優子氏の論文では、連体形動詞を取る主文と補文の特性から古代日本語が統語的能格言語として分析できることが論じられ、吉村紀子氏の論文で、熊本八代方言のガ・ノ交替現象から日本語の文構造が考察されています。最後の3編（黒木暁人、藤巻一真、綿貫啓子、各氏の論文）は、共に日本語の主文に特徴的な右方転移文現象を扱い、移動理論との関わりを含め、右方転移に見られる新しい言語事実を指摘しています。限られた頁数と時間内に論文を用意して下さった執筆者の方々に深く感謝いたします。

CLSでは、上記のワークショップの他に、通常の活動として、井上和子CLS顧問による定期研究会、言語学コロキウム、早期英語コロキウムなども開催してきました。（巻末のCLS活動報告を参照してください。）

CLSが支援している公的補助金による研究プロジェクトは、今年度は3つあります。日本学術振興会科学研究費の補助金によるものは『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』（研究代表者：木川行史）、および、『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（研究代表者：小林美代子、研究分担者：長谷川信子、堀場裕紀江、他）です。この2つの成果については、各々報告書が刊行されます。（巻末の研究活動報告を参照してください。）もう一つは、科学技術振興事業（JST）社会技術研究事業の公募型研究領域＜脳科学と教育II＞による他大学との合同研究プロジェクト『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』（研究リーダー：萩原裕子、首都大学東京）で、CLSでは、そのサブ領域の「言語能力検査・評価」を担当し（研究代表者：長谷川信子／研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）応用言語学、理論言語学に基づいた独自の言語テストの開発を目指しています。

研究員の山田昌史さん、事務担当の椎名千香子さんには、本紀要の編纂、ワークショップ等の遂行を含めCLS研究活動全般について多大な尽力をいただきました。感謝いたします。研究補助をして下さった神谷昇さんはじめ多くの大学院生、研究生にもお礼を申し上げます。CLS発足当初より研究員としてCLSを支えて下さった山田昌史さんは、4月より島根県立大学に奉職することが決まり、CLSは今年度が最後となりました。本当に世話になりました。新天地での活躍を期待しております。

2006年3月
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

※1 そのワークショップで発表された論文のうち、残念ながら、イヴァナ・アドリアン氏と酒井弘氏の共著の日本語の尊敬語を扱った論文、金水敏氏の格助詞の分布制約についての論文、三宅知宏氏の疑問表現と統語構造に関する論文の3編は収録することができなかった。

長谷川 信子
日本語の主文現象と統語理論：今、主文現象が面白い

日本語の主文現象を「今」理論的視点をもって考察することの意義を、日本における日本語の統語研究および理論研究の観点から、また、統語理論の変遷と今後の発展の観点から、論じる。近年、理論が抽象度を増し、様々な言語の現象に対応できるシステムとなりつつある反面、その抽象性故に、個別言語の持つ具体的な現象から乖離してきている、すなわち、理論的概念のみが一人歩きし、その理論の方向性と正しさを証明するはずの言語現象の観察がおろそかになってきている、との感を持つ者は少なくないであろう。しかし、理論の発展は、同時に、何が統語論プロパーな領域なのかという本来的な問題に再考を促しており、これまで語用現象として統語的考察から外されてきた現象にも統語理論の観点からアプローチすることの意義がこれまでとは異なった形で認識されつつあると思われる。このことは、今後、日本語の主文現象を軸に、理論的にも、記述的にも、新たな言語研究の波を起こすことができるのではないかと期待を抱かせるのである。

井上 和子

日本語の条件節と主文のモーダリティ

日本語の条件表現の研究は歴史が長く、多くの研究成果が生まれた。特に1980年代以降話者の発話に対する認識のモデルと発話・伝達のモデルの研究が進んだ。その成果としての個々の条件節の意味記述を統一的に扱うために、本研究では、条件節の時制辞のモデル的機能と条件接続要素の統語的、意味的特質に焦点を当て、意味分析及び主文の発話・伝達のモーダリティの選択にこれらがどのように関与するかを中心に論じる。

伊藤 健人

取り立て助詞とモダリティについて

本稿は取り立て助詞とモダリティの関係について、日本語の記述的研究から観察された言語事実を挙げ、それらが統語構造にどう反映されるのかを、生成統語論に対する課題として提示したい。具体的には、「取り立て」と「モダリティ」という日本語文法の主文現象に関わる中心的な事柄を取り上げ、(1) 命題とモダリティの境界 (2) 日本語のモダリティに関する記述的研究(観察)の統語構造への反映 (3) 取り立ての機能の統語構造への反映 (4) 取り立て助詞の統語的位置 といった事柄について問題提起を行った。

佐野 まさき

とりたて詞をめぐる認可条件とカラ節

日本語のいわゆるとりたて詞は、文末との呼応が明白なものともそうでないものがある。たとえば「健は酒さえ飲んだ」に見られるとりたて詞サエは一見特定の述部と呼応することを要求しない。これは「飲んだ」の部分で「欲しがった」「飲まなかった」「飲んでた」「飲んだようだ」などあらゆる形に変えても、サエとの文法的な関係に問題が生じるといえることはないことからそのように見える。一方「健は酒でも飲んだようだ」に見られる例示的なデモは、「ようだ」「に違いない」などのモダリティ表現で終わることを要求し、「飲んだ」で終わることはできない。本論はしかし、このような区別は文法的には意味がなく、むしろすべてのとりたて詞がそれ自身の呼応述部、認可子を持つという立場をとる。それによりとりたて詞の文中、特に従属節内での分布制限が普遍文法的一般原理により自然に捉えられることを示唆する。

内堀 朝子

命令・祈願・感嘆表現の統語構造をめぐる

本論では、日本語における主文表現の中から、命令・祈願・感嘆表現を取上げ、それらの統語構造について、基本的な性質を検討する。これらの表現の統語構造には、(i)動詞の形態変化、(ii)モダリティを示す補文標識、(iii)モダリティを表わす語彙要素、が見られるが、本論では、これらの表現のうち、「こと」「ように」という共通する形態を文末に伴うものを主に議論する。特に(i)(ii)に関しては、動詞の取りうる形態変化上imperativeと、補文標識によって示されるsubjunctiveの相違、また、(iii)に関しては、補文埋込み構造を有する構造について、考察する。具体的には、これらの表現と、主文現象としての丁寧表現との共起が許されるかどうか、また、これらにおいて、非主文現象および名詞性の指標としての「が・の」交替現象が起こるかどうかについて観察し、これらの表現の統語構造を探る手がかりとする。

HIDEKI KISHIMOTO (岸本 秀樹)

Japanese as a Topic-Movement Language

In light of the focus particle dake "only" attached to tense, this paper argues that Japanese has topic movement, which moves wa-marked topic phrases into CP. Other ordinary phrases—including ga-marked subjects—are argued to be located below TP with no movement

into CP. It is also argued that Japanese shows no evidence for wh-movement, despite Takahashi's claim (1993, 1994) to the contrary. The discussion shows that while English is a wh-movement language, where CP is filled with wh-phrases, Japanese is a topic-movement language, in which a topic is placed in CP to form a topic-comment structure.

上山 あゆみ

節の構造とjudgmentタイプ : Where Thetic/Categorical Distinction Meets Grammar

特に S.-Y. Kuroda 氏の一連の著作以来、categorical judgment とthetic judgment の区別があること、および、その区別と節構造との間に対応関係があることが様々な分析において主張されてきたが、本論文では、節構造の違いがjudgment type と1対1対応関係にあるという仮説は、2種類の節の意味解釈の違いの本質を正しくとらえていないということを指摘したい。judgment とは、assertion の対象となっている節だけが持つものであるが、この2種類の節の意味解釈の違いは、assertion の対象ではない節にも広く見られるからである。節構造の違いが対応しているのは、意味合成の方法であり、そもそも命題に2つのタイプがある。judgment タイプの違いは、単にその命題のタイプに影響を受けているにすぎないということを主張する。

長谷川 信子

1人称の省略 : モダリティと授与構文

日本語では、名詞句が頻繁に省略されることがよく知られているが、それは日本語では「主題」を省略することが可能であることに起因すると考えられてきた。本論文では、1人称の省略は「主題」の省略では説明のつかない別のプロセスがあること、1人称は主語と目的語では省略の引き金となる要因および構造が異なること、補文における1人称の省略は補文のタイプにより異なることを示し、1人称省略現象に関し記述的一般化を提示すると共に、統語構造の観点からの分析を提示する。すなわち、主文のCPシステムには、主題と関わるTopicの他に1人称の省略を可能にする機能範疇（便宜的に、Modality Phrase: ModP）が存在すること、1人称の目的語の省略には、vPにクレルに代表される授与動詞のような機能範疇が関わることを主張し、そうした機能範疇(phase)間の局所的な関係により1人称の省略現象が統語的に説明できることを示す。

外崎 淑子

日本語の主語の人称制限

日本語の主観的判断を表す動詞や、感情・感覚を表す形容詞には主語の人称制限があるが、はっきりと人称制限が現れるのは、主文のル形の場合のみである。タ形やテイル形、補文においてそれが観察されないのは、統語構造上、文にはモダリティを司る主要部が存在し、そのモダリティ主要部の有無と主語との適合関係が、主語の人称制限と関わるためであるということを提案する。

上田 由紀子

人称制限と統語構造

「主語名詞句の人称制限」という観点から、統語論が扱うべきモダリティの領域を模索するものである。本稿では、主語の人称制限には、2つのタイプがあることを示す。一つは、モダリティに要求されるもの。さらに、人称制限に関わっているのは、E-modalではなく、D-modalの方であることを示し、意味的、語用的ばかりでなく、モダリティの2分化の統語的妥当性を明らかにする。もう一つは、補助動詞の特性によるものである。両者の違いは、表面上ではわかりにくいのが、埋め込み文中での人称制限の消失の有無という点で異なる。主文と補文におけるこのような違いは、人称制限の現象が単に意味的、語用的側面だけでなく、統語的にも関与する余地のある問題であることを示唆することとなる。

柳田 優子

古代語における動詞連体形節内の格付与について

万葉集、平安初期の訓点資料の調査から、上代語には2つの重要な特徴がある。1) 他動詞の主語と非能格動詞の主語は「ガ」によって標示されるが、非対格動詞の主語は「ガ」で標示されない。さらに「ガ」で標示された要素は外項主語位置から移動できない。2) 「ヲ」は他動詞の目的語と非対格動詞の主語を標示することができ、さらに標示された要素は常に動詞句の外へ強制移動する。この語順の制約は古代語が「統語的能格言語」に属することを強く示唆する。本研究では連体形動詞をとる主文と従属節に焦点をあてそれぞれの節内の格付与について考察する。

吉村 紀子

熊本八代方言から日本語を見る：主格の「が」・「の」をめぐって

本論は日本語において共通語だけでは理解できない問題を解く手がかりとして方言研究の知識を適用する試みである。考察では、主格表示の「が」と「の」について、特に「が/の」の交替に焦点を絞り、Harada (1971)の議論に熊本八代方言の事実を交流させつつ、最近の「主語移動説」に対して「基底生成説」を再考する。この方言は大主語に「が」を、叙述主語に「の」を区別して用いるため、「が/の」の交替に新たな見解をもたらすことになる。分析から、第一に、主文は「NP-の」の「NP-が」を越える移動が許容しないのに対し、関係節は「NP-の NP-が」の語順が可能であること、第二に、関係節の主語の位置に再叙代名詞が生起できること、が明らかになる。その結果、問題の「NP-の」はDPの指定部に基底生成されたNPに属格の「の」が付与されたもので、埋め込み節の主語はゼロ代名詞のproであることを主張する。したがって、「が/の」の交替はpro-drop現象に係わる事実として捉えることができよう。このような成果を踏まえ、統語理論と方言研究との交流の必要性和重要性を強調する。

黒木 暁人

日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から

本稿は日本語の右方転移/後置文を考察し、従来右方移動(Haraguchi 1973, Simon 1989)が関与するとの指摘がなされてきたこの構文が、動詞句前置/残余句移動(Muller 1996, Kayne 1998)等による左方移動の一例として分析されるべきであると主張する。またその際、本分析が先行研究で述べられている諸特性(島の効果等)を説明するだけでなく、作用域解釈、束縛現象等の新たな事実に基づいて経験的に支持されると論じる。帰結として、本分析は左方移動のみを可能な移動操作(右方移動は原理的に禁じられる)と位置づける反対称的統語理論(Kayne 1994)と合致すると述べる。さらに、この理論の下位概念を構成するc統御、主要部後置型言語における目的語の義務的な移動、そしてCP指定部へのTP移動等が日本語の統語構造において機能する可能性も併せて示唆する。

藤巻 一真

慣用句と右方転移

日本語の右方転移文にはさまざまな提案(Abe 1999, Endo 1996, Haraguchi 1973, 井上1978、久野1978, 黒木2005, Tanaka 2001, Watanuki & Hasegawa 2003等)がなされているが、本稿では、慣用句の絡んだ右方転移文の新たな例を提示し、それが理論的にどのように捉えられるかを考察する。特に、左方移動による慣用句の固定性の違いを基に、右方転移文において、慣用句がどのような振る舞いをするかを観察し、左方移動における慣用句の区別が、右方転移文においても有意義であることを示す。理論的には、本稿における固定性の低い慣用句の右方転移文を扱っているTanaka 2001に基づく説明を試みる。そして固定性の高い慣用句の右方転移文も含め、本稿における現象は、proと左方移動の両方を含むTanaka分析によって説明が可能であることを示唆する。

綿貫 啓子

日本語の後置文：左方移動文との相違

日本語の後置文の統語構造や派生について、本論では、スクランプリングを含む左方移動文と後置文との相違を中心に議論する。従来の分析は、後置される要素が名詞句を主な分析対象としてきたが、本稿ではまず、名詞句のほか、後置詞句や副詞などが後置されるデータを考察する。次に、Merchant (2004)での英語のFragmentの分析を援用し、語用の観点も視野に入れた分析を試みる。その上で、日本語の後置文は2つの文から構成され、右方に移動しているように見える要素は文の一部(断片)であること、また、この断片と先行する文とが解釈の段階であたかも新しい一つの文(主文)として振る舞うことを論じる。